

RAILWAY & CINEMA



誓いの休暇
(1959年/ロシア・88分)
発売元/株式会社アイ・ヴィー・シー
価格/4,935円(税込)

今回は、ロシア映画と言うよりソビエト映画と言った方が正確かもしれないが、一九五九年製作、グリゴリー・チュプライ監督の「誓いの休暇」を紹介する。

一九五六年の第二十回党大会でのスターリン批判以後、一九六五年くらいまでのいわゆる「雪解け期」に、戦後のソビエト映画の秀作は集中している。ちょうど文化革命の後の一九八〇年代に中国映画の秀作が多く見られるのと同じように、完全に自由な表現が認められているわけではないが、従来より思想表現の自由が緩和されたなかで才能ある監督が映画を撮ることに強い意欲を燃やした結果である。そのなかでもチュプライ監督は、一九五六年に「女狙撃兵マリユートカ」という、当時のソビエトではタブーに近い国内戦時の赤軍と白軍の男女の恋愛を扱った見応えのある映画を撮っている。タルコフスキーなどとともに、当時のソビエト映画の新しい流れの旗手であったと言える。

鉄道と映画 — 17

青年兵士と少女のほのかな恋。
兵士の帰郷を軸に反戦をうたった名作。

BALLAD OF A SOLDIER

「誓いの休暇」



文・羽生次郎

text by Jirou HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・国際問題研究所長を務める。フィルム・コミッション(FC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

この監督の好む題材の一つは、戦争に巻き込まれた男女のヒューマンな行動を通じて、その残酷さを現すことであると思う。ひとつ間違えると感傷過多の映画になってしまう可能性があるが、「誓いの休暇」では、このやり方が成功している。

映画は、独ソ戦真つ只中に偶然に武勳を立てた若い兵士アリューシャが、特別にもらった休暇を利用して、母の家に戻るまでの旅のさまざまな出来事を撮ったものである。戦争が終わって平和が訪れた村で、初老の婦人が寂しげに村はずれの道を見やるところでナレーションが入り、彼女の息子アリューシャは戦争から帰らなかつたことが知らされる冒頭のシーンの出来がよく、映画に引き込まれてしまう。この息子、特別休暇で家に帰ろうとするのだが、生来の人の良さから、頼み事を引き受けたり、傷痍軍人の面倒を見たりするため、なかなか母の家に着かない。やつとの思いで乗り込んだ軍用列車の中で、規則違反で乗車してきた少女とほのかな恋愛感情をお互いに持つようになる。少女がだんだん警戒心を解き、アリューシャに好感を持つまでの過程が大変初々しく、巧みに表現されている。そして、村の近くまで列車が到着した時、爆撃に遭い、同乗者は死傷し、鉄道は破壊される。果たしてアリューシャは家に着き、母に会えるのだろうか。

「誓いの休暇」は、一種のロードムービーと言えるが、主な交通手段は鉄道であり、全編のほぼ半分が列車と駅のシーンである。戦時中という設定もあるが、当時のソビエトの鉄道事情の困難さがよく出ており、ロシア国内で実際に撮影したためであろうが、「ドクトルジバコ」のロシアの鉄道シーンよりもリアリティーがある。なかでも、目的地に着いた少女と、アリューシャが別れる場面、プラットフォームで少女に自分の住所を教えるが、既に列車は動き出しており、身を乗り出して叫ぶが、少女に聞こえない。二人が二度と会うことがない将来を暗示しており、若干センチメンタルかもしれないが、駅を舞台にした別れのシーンとしては、良く撮れている。

「誓いの休暇」は、戦争に馴染みの無い戦後世代にも戦争の残酷さを訴えかける、質の高い反戦映画と言える。